

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21820020

研究課題名（和文）

野口寧斎についての基礎的研究、及び漢詩を中心とする明治文学についての考察

研究課題名（英文）The Study on Noguchi Neisai, and the survey on the Meiji Era literature including the Chinese Classical poetry written by the Japanese

研究代表者

大阪大学・文学研究科・講師

合山 林太郎 (GOYAMA RINTARO)

研究者番号：00551946

研究成果の概要（和文）：

野口寧斎（1867 - 1905）は、明治中期に活躍した漢詩人であり、小説批評や中国文学研究など多くの領域で活躍している。本研究では、寧斎の手稿などを含む寧斎関係の資料を網羅的に収集・整理し、寧斎の文芸活動の全貌や、彼を取り巻く文化圏の様相を明らかにした。その上で、幕末・明治期の漢詩壇における詩風や詩観の推移や人的なつながり、明治期漢詩壇における清詩受容の特徴などについて分析した。

研究成果の概要（英文）：

Noguchi Neisai (1867 - 1905) was a Chinese classical poet in the middle Meiji Era. He was also known as a literary critic, Chinese literature researcher at that time. In this study, the historical documents on Neisai's literary activity, including the Neisai's manuscripts, were collected comprehensively. The entire pictures of Neisai's literary activity, his cultural background, his relationship with other literary person were pictured. The trend of the Japanese written Chinese classical poetry in the 19th century and the influence of the Qing dynasty's poem on it were also analyzed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010年度	960,000	288,000	1,248,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,030,000	609,000	2,639,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本漢詩、明治文学、漢文学、森槐南、森春濤、文人、諫早

## 1. 研究開始当初の背景

漢詩を中心とする漢文学は、明治期の文学の重要な一角を占めていた。このことは、明治期の新聞雑誌に多数の漢詩欄が設けられていることからもうかがえる。

もっとも、漢詩文は、新たな文芸の潮流に適応できなかった詩歌形式として、小説や新体詩、俳句などに比べて重要性の低い文芸と

して取り扱われ、明治文学研究の上で、十分に分析されることがなかった。しかし、1990年頃から、次のような理由により、急速にその存在が注目されるようになった。

まず、明治前期の文芸において、漢詩や漢文をはじめとする近世以来の伝統文芸が、きわめて大きな存在感を持っているということが、強く認識されるようになった。これは、

明治前期の資料の調査が進んだことや、近世文芸を専門とする研究者が明治期の文学について、積極的に発言を行うことによって起こった動きであったと言えよう。すなわち、文芸作品は、新しさの面ばかりに光を当てて評価すべきではなく、過去の文芸とつながりという視点からも評価されなければならないと考えられるようになったのである。

次に、明治20年代から30年代に活躍していた森槐南ら漢詩人たちの動きが、近代文学研究のから注目されるようになったという事情がある。たとえば、正岡子規をはじめ、同じ時期に詩歌革新に携わった人物の多くが、明治漢詩壇において、若手漢詩人が台頭し、旧世代の詩人とは異なる詩風を展開させたことを賞賛している。こうした当時の文壇の、漢詩人たちへの高い評価に対する理解なくしては、明治詩歌史を偏りなく捉えることはできないのではないかという意識が醸成されたのである。

以上は、明治文学研究における潮流であるが、日本漢文学の側から見ると、1970年代以降、近世漢詩についての研究の蓄積が進み、明治期以降、漢文学は、どのような消長を迎えたのかという点に注意が向けられるようになった。

さらに、2000年以降、東アジアを一つの漢文文化圏と捉え、漢文学などこの地域に共通して存在する文学を、総合的に理解しようという気運がしだいに高まった。その中で、清国の文人と活発な交流を行っていた明治期の漢詩人・漢文学者の存在に、注目が集まるようになった。

このような状況下、報告者は、以前より野口寧斎という漢詩人が、明治期の漢詩壇の中心に位置しながら、巖谷小波、尾崎紅葉、森鷗外、正岡子規など多数の文学者とも活発に交流していることに興味を持ち、その事蹟を調べ、いくつかの論考を発表していた。また、寧斎に関する膨大な資料群が関西大学図書館に蔵されていることを知り、その一部を調査した。

ただ、膨大な関係資料の全てを調査することはできず、寧斎を中心とする、漢詩や小説や出版など、様々な領域にまたがる人的ネットワークについては、その一部しか考究できていなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の主要な目的は、以下の5点である。

(1) 寧斎の生涯や文学活動に関する情報を明らかにする。寧斎の伝記については、辞典類などの簡略な説明しか利用できない状態にあり、基礎的資料の整理・収集を通して、伝記的事実や交友関係について、より情報の蓄積を行い、明治漢詩壇や、漢詩人と小説家との関係についての考察へとつないでゆく必

要がある。

(2) 寧斎の家系及び祖先の事蹟について、漢詩や文芸との関わりを中心に明らかにする。祖父良陽、父松陽が、寧斎に強い影響を与えていることは、寧斎がしばしば彼らについて言及していることから間違いない。また、二人はともに京坂の漢詩壇とつながりを持っており、幕末期の漢詩の有り様を理解する上でも重要な存在である。

(3) 寧斎の漢詩の特徴を検討する。具体的には、清代中国の詩や近世日本の漢詩と比較することによって、寧斎の詩を、日本漢文学史上、あるいは、明治漢詩史上に位置づける。また、寧斎の詩の一特徴である、時事詠の詩や文芸批評漢詩（変体の漢詩によって、当時の小説家や小説作品を品評したもの）について、正確な解釈を行う。

(4) 寧斎の小説観について、その内容を詳密に分析し、明治20年代の小説史の中で位置づけることを試みる。寧斎の小説時評は、従来の近代文学研究においては、高く評価されていないが、寧斎の評価基準に則って当時の小説の世界を把握し、これまでの近代小説研究における理解とどのような偏差があるのかを検討する。

(5) 寧斎の古典漢詩についての注釈や解釈の特徴を明らかにし、合わせて、明治期の漢詩理解の特徴を探る。また、寧斎の中国文人との交流の様相を追い、日中交流史の中における、寧斎の文業の位置づけを試みる。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、以下の5項目に要約できる。

(1) 寧斎の伝記や文芸活動に関する基礎的データを、次の2つの方法によって収集した。

まず、関西大学図書館に所蔵される野口寧斎・松陽関係資料約450点を整理した。当該資料は、寧斎一家の詩文稿や、寧斎の書簡写や原稿、松陽の日記、さらに断片的な詩箋や回覧用の詩稿を多数含んでいる。これら全てについて、書型（形態）、丁数（枚数）などの基礎的書誌事項をデータ化し、罫紙や原稿用紙の種類、筆跡、印記などから筆者、書写者、書写年代などを特定または推定した。

次に、国立国会図書館、東京大学附属図書館などの諸機関において、『新新文詩』『鷗夢新誌』『作詩作文之友』などの漢詩文雑誌や『城南評論』『早稲田文学』といった文学雑誌、『国民之友』『太陽』などの総合雑誌、『毎日新聞』『日本』といった新聞を調査し、寧斎執筆の評論・批評・雑文などを収集した。

なお、寧斎によって発刊・編集された漢詩雑誌『百花欄』については、とくに同誌に多数掲出されている、寧斎とつながりのある漢詩人や文学者からの書簡を吟味することで、寧斎の交友関係や当時の漢詩壇の状況に関

する情報を取得した。

(2)寧齋の伝記、及び、寧齋の父松陽、祖父良陽を明らかにするため、詩稿、日記などから得た情報を時系列に並べ、寧齋の生涯や文芸活動の全体像が理解できるようにした。

これに加えて、寧齋の出身地である諫早においてフィールドワークを行った。諫早市立諫早図書館において、諫早領公文書『諫早日記』中より、寧齋の祖父良陽、父松陽に関する記録を抽出し、寧齋の実弟である島文次郎関係の資料を閲覧した。また、諫早市郷土資料館において、幕末・明治期の諫早に関する資料を調査した。さらに、諫早在住の郷土史家の方の協力を得て、野口家の居住地跡や、諫早領内家臣団における野口家の位置づけなどについて考察した。

なお、寧齋の父松陽と関連することとして、松陽が参加した、明治初期の森春濤を中心とする漢詩グループについて、主として詩風の点から検討を行った。

(3)寧齋の漢詩の特徴を析出するため、まず、寧齋の時事詩及び文芸時評漢詩について、詠詩の対象となった事件や作品について、明治期の新聞雑誌中の記事を注釈資料として用いつつ、作品を解釈した。

また、寧齋の詩全般について、清代乾隆年間に活躍した詩人蔣蘊園の詩風との比較を行った。蔣蘊園は、寧齋自身が、若年期に感銘を受けたと回想する人物である。

ただ、この過程で、寧齋の作品には、師である森槐南の手が相当に入っていることが判明したため、槐南の詩観について、一定の知見を得ることが必要であるとの認識に至った。槐南の詩についての認識は、『新新文詩』所載の詩話などによってもうかがえるが、より精細な理解を得るため、東京大学附属図書館所蔵の森槐南旧蔵書の書入れの一部を調査した。

(4)寧齋の小説に関する考え方について、寧齋が親しくした須藤南翠の小説や、明治前期の新聞雑誌に掲載された評論に表れた小説観との比較を試みた。

寧齋は、「小説は美術（芸術）であり、人情を描くことが主眼となる」という坪内逍遙の主張に強く影響されているが、同時に、小説の持つ読者を善へと導く役割、すなわち、小説の社会的効用についても強く意識している。こうした寧齋の思考の構造について、文学史、社会史、女性史など、様々な領域の研究を参照し、整理した。

(5)寧齋の中国学に関しては、その著作『三体詩評釈』（新進堂、明治26-27年刊）中の注釈について、近世期以降の『三体詩』の和訳や注釈や、現代の諸注釈書における解釈と比較し、寧齋の古典詩理解の特徴を析出した。

また、中国文人との交流については、明治33年、戊戌の政変後の混乱を逃れ、来日した

文廷式との交流に絞って検討を行い、『百花欄』などから、関係する記事を抽出し、交流の実態がどのようなものであったかを分析した。

#### 4. 研究成果

上記のような検討を経た結果、以下のような成果及び知見を得た。

(1)関西大学図書館の野口寧齋関係資料については、書誌事項や筆者者、書写者、制作（執筆）年代を記した簡易目録を作成した。当該資料には、寧齋の若年期から没年に至るまでの詩稿が含まれている。また、松陽の詩稿には、後藤松陰、森田節齋、河野鉄兜、柴秋村など、幕末関西の文人の朱筆が施されており、幕末・明治期の漢詩文化を考える上できわめて重要である。また、新聞・雑誌において収集した情報から、寧齋の評論・随筆一覧の一覧を完成した。

これらの目録や一覧については、筆者や執筆者が誰かという点で、なお検討すべき点があり、また、より広範な資料を調査する必要性が感じられたことから、今後、十分な考証・調査を施した上で公開したいと考えている。

(2)寧齋の祖先及び家系に関する検討においては、関西大学の資料を精査することによって、寧齋の祖父良陽が、吐方に意を用いた漢方医であったこと、幕末期の西洋列強の進出を前に、佐賀藩からの命に従い、長崎で西洋医学を学んだこと、父松陽の関西遊学は、長崎に滞在していた柴秋村を良陽が訪問し、息子の遊学を依頼したことが契機となっていること、松陽が先祖からの業である医を廃し、儒に転じる際、様々な議論がなされたこと、松陽は幕末期から、維新側の勢力に同情的な詩を制作していることなど、多くの知見を得ることができた。

(3)寧齋の漢詩については、「韻語陽秋」の批評対象作品の一覧を作成した。また、日清・日露戦争中に制作された漢詩について、新聞記事などを参照しつつ解釈を行い、寧齋の漢詩の内容が当時の戦争報道と密接に結びついていることが明らかとなった。

寧齋の詩の分析の前提となる、森槐南の詩に対する考え方について、槐南文庫の書入れを調査した結果、槐南は、錢謙益、吳梅村、王漁洋、朱彝尊ら、清初の詩人の作品を、若年期に集中して読書していること、とくに王漁洋については、伝記的な事実をも含め、相当量の知識を有しており、時に、王漁洋に対して批判的な言辞をも投げかけていることなどが明らかとなった。

(4)寧齋の小説観については、小説の芸術性と教誡性を同時に認める彼の考え方が、明治20年代初頭において、かなり広範に見られることを確認した。近代文学研究の中で軽視されがちであった寧齋の思考は、明治期の社会

においては、一定の支持層を得ていたと思われる。その小説批評は、黎明期の小説や文学の観念を考える上できわめて示唆に富む事例であるとの認識を得るに至った。

(5) 寧斎の中国学については、その古典漢詩理解が、作品の意味だけではなく、言葉の配置や語句の連関などに注意を払っているという点で、今日の中国文学研究における漢詩注釈の態度とは、相当異なっているという理解を得た。また、評論の内容などから、寧斎が中国戯曲にも関心を持っていたことが分かった。

文廷式との交流については、その背景に、当時、中国で汽船事業を立ち上げていた白岩龍平を中心とするネットワークの存在があると推定するに至った。

以上の成果の一部を、次項に記載する2篇の論文及び解説・資料紹介において発表した。また、これらの知見に基づいて、寧斎に関する既発表論文の改訂・修正を行い、東京大学に提出した博士論文「幕末・明治期の漢文学の研究」の第三部「野口寧斎考」に充当した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

① 合山林太郎 「『漁洋山人精華録訓纂』への森椀南自筆書入れ」(『江戸書物の世界 - 雲英文庫を中心にたどる』笠間書院、2010年、pp848 - 856)(なお、本業績は、図書に資料翻刻が掲載されたものである。) 査読無し

② 合山林太郎 「幕末明治期の詠物詩—大沼枕山一派の詩風をめぐって」(『語文』94、2010年、pp11-19) 査読無し

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大阪大学・文学研究科・講師

合山 林太郎 (GOYAMA RINTARO)

研究者番号：00551946

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし